

この『最難問題集 国語』は、『予習シリーズ』および『演習問題集』

を学習した後、さらに上を目指す人に向けて、思考力や記述力をみがくために作られた問題集です。

### 各回の構成

#### ① 出題文章について

『予習シリーズ』よりも難易度の高い文章を出題しています。長い文章であっても、最初から最後まで読み通す力を培うことができます。

#### ② 設問について

記述問題を中心に出題します。書くトレーニングを積み重ねることで、難関校入試で必要とされる記述力を培うことができます。解答に必要な要素を文章中から自分で探し、解答を組み立て、正確に書くというプロセスを確認しましょう。

#### ③ 解答の根拠をつかめる

問題を解いたら必ず答え合わせをしましょう。記述問題は、模範解答と同内容であれば、別の言葉で表現しても間違ってはあります。自分の答案に書かれている内容と、模範解答の内容を見くらべ、過不足がないかを確認しましょう。その際、模範解答が本文との部分を根拠にしているのかを知ることはとても大切です。

#### ④ 効果的な使い方

- たくさん読んで、たくさん書く
 

国語の力を高めるには、たくさん読んでたくさん書くことが重要です。「時間が無い」という理由で読み飛ばしたり、「わからない」という理由で白紙にしたりしないようにしましょう。
- 解答の根拠をつかめる
 

問題を解いたら必ず答え合わせをしましょう。記述問題は、模範解答と同内容であれば、別の言葉で表現しても間違ってはあります。自分の答案に書かれている内容と、模範解答の内容を見くらべ、過不足がないかを確認しましょう。その際、模範解答が本文との部分を根拠にしているのかを知ることはとても大切です。

## 第2回 物語・小説(2)

◆次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「坊、一人でどこへ行くんだ」  
男の人が少年に話しかけた。  
少年はポケットにつつこんでいた手を、そのまま二、三度前後にゆすり、人なつっこいえみをうかべた。

「町だよ」  
これは、へんにはずかしがつたり、いやに人をおそれたりしない、すなおな子供だなど、男の人は思つたようだつた。  
そこで二人は話しはじめた。

「坊、なんて名だ」「れんて、いうんだ」「れん? れん平か」  
どういう字書くんだ  
「ううん」と少年は首をよこにふつた。

「じゃ、れん一か」「そうじゃないよ、おじさん。たたね、れんて、いうのさ」「ふうん。どういう字書くんだ。※えんなあんか」  
「ちがう。てんをうつて、一を書いて、ノを書いて、二つてんをうつて……」  
「むつかしいな。おじさんはあまりむつかしい字は知らんよ」  
少年はそこで、地べたに木切れで「廉」と大きく書いて見せた。

15

10

5

20

「ふうん、むつかしい字だな、やつぱり」

二人はまた歩き出した。

「これね、おじさん、清廉潔白の廉て字だよ」

「なんだい、そのセイレンケツパクてのは」

「清廉潔白といいのは、何もわるいことをしないので、神様の前へ出ても、じゅんさにつかまつても平気だということだよ」

「ふうん、じゅんさにつかまつてもな」

「おじさん、聯隊にいたの」

「うん、ずっと前にいたよ」

「しようしゅう来ないの」

「ああ、よそへ行っておったもんだから」

「どこ」

「聯隊みたいなどころだよ」

「そういって男の人はやりと笑つた。」

「おじさんのオーバのポケット大きいね」

「うん、そりや大人のオーバは大きいから、ポケットも大きいさ」

「あつたかい?」

「ポケットの中かい? そりやあつたかいよ。ぼこぼこだよ。こたつがはいつているようなんだ」

「僕、手を入れてもいい?」

「へんなこという小僧だな」

男の人は笑いだした。でも、こういう少年がいるものだ。近づきになると、あいてのからだにさわつたり、ポケットに手を入れたりしないと、しうちができぬという、ふうがわりな、人なつっこい少年が、「入れたつていよいよ」

45

40

35

30

少年は、男の人の外套のポケットに手を入れた。

「何だ、ちつともあつたかくないね」

「はッは、そうかい」

「僕たちの先生のポケットは、もつとぬくいよ。朝僕たちは学校へ行く時、かわりばんこに先生のポケットに手を入れてゆくんだ。木山先生というのさ」

「そうかい」

「おじさんのポケット、なんだかかたい冷たいものがはいつてるね。

「これ何?」

「なんだと思う」

「かねでできるね……大きいね……何かね・じみたいなもんがついてるね」

するとふいに、男の人のポケットから、美しい音楽が流れ出したの

で、二人はびっくりした。男の人はあわててポケットを上からおさえ

た。しかし音楽はとまらなかつた。それから男の人はあたりを見まわ

して、少年のほかには誰もいないことを知ると、ほつとしたようすで

あつた。天国で小鳥が歌つてもいるような美しい音楽は、まだづづ

いていた。

「おじさん、わかつた、これ時計だろ?」

「うん、オルゴールってやつさ。お前がねじをさわったもんだから、

歌い出したんだよ」

「僕、この音楽、だいすきさ」

「そつかい、お前もこの音楽知つてるのかい」

「うん。おじさん、これ、ポケットから出してもいい?」

「出でなくつてもいいよ」

すると音楽は終わってしまった。  
「おじさん、もう一ぺん鳴らしてもいい?」  
「うん。だれも聞いてやしないだろ?」  
「どうしておじさん、そんなにきょろきょろしてるの」  
「だって、誰か聞いていたらおかしく思うだろ? 大人がこんな子供のおもちゃを鳴らしてては」

「そうね」

そこで、また男の人のポケットが歌いはじめた。

二人はしばらくその音をききながら、だまつて歩いた。

「おじさん、こんな物をいつも持つて歩いてるの」

「うん。おかしいかい」

「おかしいなア」

「どうして」

「僕がよく遊びにゆく薬屋のおじさんの家にも、うた時計があるけどね、大事にして店のちんれつだの中に入れてあるよ」

「なんだ、坊、あの薬屋へよく遊びに行くのか」

「うん、よく行くよ。僕の家のしんるいだもん。おじさんも知つてゐる」

「うん……ちょっと、おじさんも知つてゐる」

「あの薬屋のおじさんはね、そのうた時計をとても大事にしていてね。僕たち子供になかなかさわらせてくれないよ……あれツ、またとまつちやつた。もういつべん鳴らしてもいい?」

「きりがないじゃないか」

「もう一ぺんきり。ね、おじさんいいだろ。ね、ね。あ、鳴り出しちやつた」

「(2)二いつ、じぶんで鳴らしといて、あんこといつてやがる。するやつたよ」

「その薬屋のおじさんは、その周作……どかいう息子のことを何といつてるかい」

「ばかなやつだつて、いつてるよ」

「そつかい。そうだなア、ばかだな、そんなやつは。あれ、もうとまつたな。坊、もう一どだけ鳴らしてもいいよ」

「ほんと?……ああ、いい音だなア。僕の妹のアキコがね、とつてもうた時計がすきてね、死ぬ前にもう一ぺんあれをきかしてくれて泣いてぐずつたのでね、薬屋のおじさんのどこから借りて来てきかしてやつたよ」

「……死んじやつたのかい」

「うん、おとしのお祭りの前にね。やぶの中のおじいさんのそばにお墓があるよ。川原からおとうさんがこのくらいの円い石を拾つて来て立ててある、それがアキコのお墓さ、まだ子供だもんね。そしてね、命日に僕がまた薬屋からうた時計をかりて来て、やぶの中で鳴らして、アキコにきかしてやつたよ。やぶの中で鳴らすと、すずしいような声だよ」

「うん……」

二人は大きな池のはたに出た。向こう岸の近くに黒く二、三羽の水鳥がうかんでいるのが見えた。それを見ると少年は、男の人のポケツトから手をぬいて、両手をうちあわせながら歌つた。

「ひいよめ、

ひよめ、  
だんご、やアるこ  
くウぐウれツ」  
少年の歌うのをきいて、男の人がいつた。

「周作つて、おじさんの子供なんだよ。不良少年になつてね、学校がすむどどつかへ行つちやつたつて。もうずいぶん前のことだよ」

「えッ……ふうん」

「周作つて、おじさんの子供なんだよ。不良少年になつてね、学校がすむどどつかへ行つちやつたつて。もうずいぶん前のことだよ」

「今でも、その歌を歌うのかい」  
 「うん、おじさんも知ってるの」  
 「おじさんも、子供のじぶん、そういうて、ひよめにからかつたものさ」  
 「おじさんも小さい時、よくこの道をかよつたの」  
 「うん、町の高等科へかよつたもんさ」  
 「おじさん、またかえつて来る？」  
 「うん……どうかわからん」  
 道が二つにわかれているところに来た。  
 「坊はどうかわからん」  
 「坊はどっち行くんだ」  
 「こつち」  
 「そうか、じゃ、さいなら」  
 「さいなら」  
 少年は一人になると、じぶんのポケットに手をつつこんで、ぴょこ  
 んびょこんと跳ねながら行つた。  
 「坊ウ、ちょっと待てよオ」  
 遠くから男の人呼んだ。少年はけろんと立ちどまつてそつちを見  
 たが、男の人しきりに手をふつてゐるので、また戻つて行つた。  
 「ちょっとな、坊」  
 男の人は少年がそばに来ると、少しきまりのわるいような顔をして  
 いた。  
 「実はな、坊、おじさんは昨夜その薬屋の家でとめてもらつたのさ。  
 ところが今朝出る時あわてたもんだから、まちがえて薬屋の時計を持  
 つて来てしまつたんだ」  
 「……」  
 「坊、すまんけど、この時計とそれからいつも（と外套の内かくし  
 い）つた。

「そいや、今しがた村から誰か男の人が出て來るのと、いつしょに  
 ならなかつたか」  
 「いつしょだつたよ」  
 「あツ、そ、その時計、お前はどうして……」  
 老人は少年が手に持つてゐるうた時計と懐中時計に眼をとめていつ  
 た。  
 「その人がね、おじさんの家でまちがえて持つて來たから、返してく  
 れつていつたんだよ」  
 「返してくれろつて？」  
 「うん」  
 「そうか、あのばかめが」  
 「あれ、誰なの、おじさん」  
 「あれか」  
 そつ言つて老人はまた長く咳入つた。  
 「あれは、うちの周作だ」  
 「えツ、ほんと？」  
 「昨日、十何年ぶりで家へもどつて來たんだ。長い間わるいことばかりして來たけれど、今度こそ改心してまじめに町の工場ではたらくことにしたから、といつて來たんで、一晩とめてやつたのさ。そしたら、今朝わしが知らんでいる間に、もう悪い手くせを出して、この二つの時計をくすねて出かけやがつた。あのごくどうめが」「おじさん、そもそもね、まちがえて持つて來たんだつてよ。ほんとによつてゆくつもりじやなかつたんだよ。僕にね、人間は清廉潔白でなくちゃいけないつていつたよ」  
 「そうかい。……そんなことを言つていつたか」  

から小さい懐中時計をひっぱり出して）まちがえて持つて來ちまつたから、薬屋に返してくれないか。な、いいだろ」「うん」少年はうた時計と懐中時計を両手にうげとつた。  
 「じゃ、薬屋のおじさんによろしくいつてくれよ。さいなら」  
 「さいなら」  
 「坊、何て名だつたつけ」  
 「坊、何て名だつたつけ」  
 「うん、それだ、坊はその清廉……何だつけな」  
 「潔白だよ」  
 「うん、潔白、それでなくちゃいかんぞ。そういうりつぱな正直な大人になれよ。じゃ、ほんとにさいなら」  
 「さいなら」  
 少年は両手に時計を持つたまま男の人を見送つていた。男の人はだんだん小さくなり、やがて稻穂の向こうに見えなくなつてしまつた。少年はでくてくと歩き出した。歩きながら、何かふに落ちないものがまるよう、ちょっと首をかしげた。  
 まもなく少年のうしろから自転車が一だい追つかけて來た。  
 「あツ、薬屋のおじさん」  
 「おウ、廊坊、お前か」  
 えりまきてあごをうずめた、年よりのおじさんは自転車から下りた。  
 老人と少年と、立てられた自転車が、広い枯野の上にかげを落としで、しばらく美しい音楽にきき入つた。老人は眼になみだをうかべた。  
 少年は老人から眼をそらして、さつさの男の人がかくれていつた遠くの稻穂の方を眺めていた。  
 野のはてに白い雲がひとつ浮いていた。  
 ※ 聯隊……軍隊の部隊の単位。

問一——線①「出さなくつてもいいよ」とあります、「男の人」がオルゴールをポケットから出したがらないのはなぜですか。

問二——線②「こいつ、じぶんて鳴らして、あんなこといつてやがる。ざるいぞオ」とあります、「男の人」の気持ちを説明しなさい。

問三——線③「坊、もう一どだけ鳴らしてもいいよ」とありますが、「男の人」がこのように言ったのはなぜですか。

問四——線④「うん、潔白、それでなくちゃいかんぞ。そういうりつぱな正直な大人になれよ」とあります、「男の人」の気持ちを答えなさい。